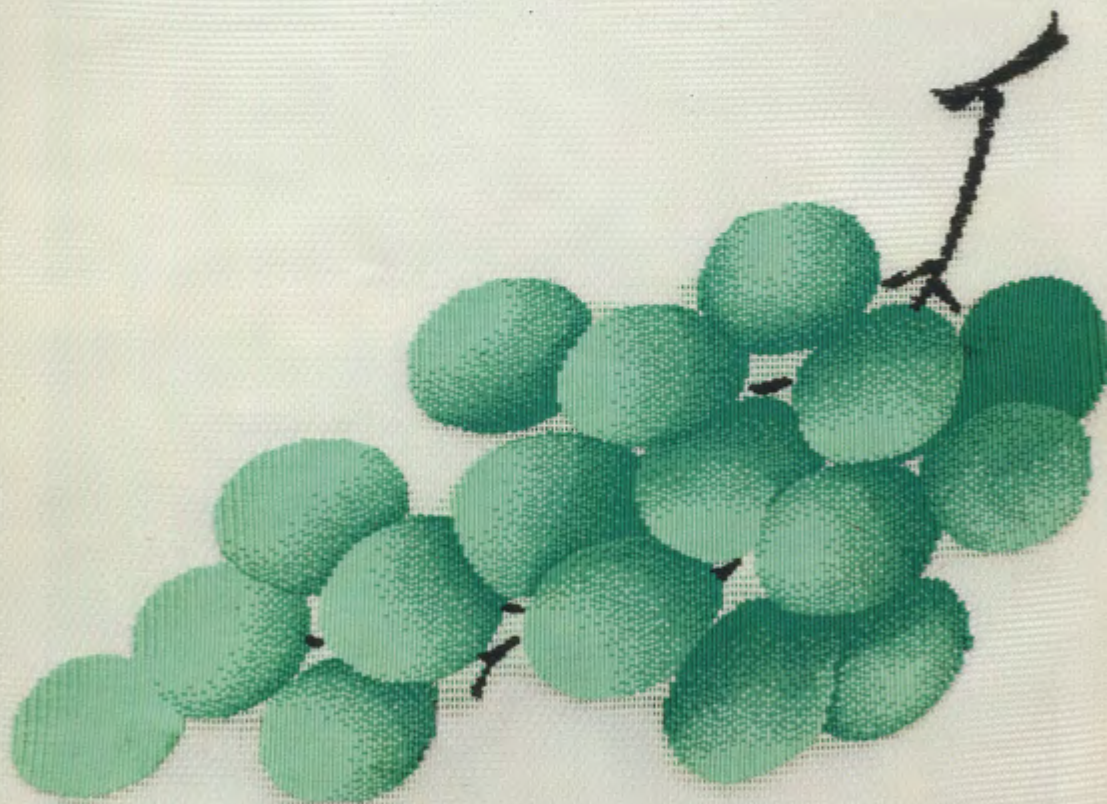


京鹿子

平成二十五年七月一日発行
通巻一〇六七号(毎月一回一日発行)



7月号

夏季吟旅特集号

豊 田 都 峰

灌 響 集 その四十七

新 緑 の 扉 ひ ら け ば ま た 新 緑

新 緑 を う ち か さ ね し て 城 址 と す

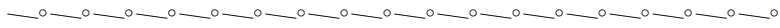
二 の 丸 へ 緑 陰 ま た も 角 つ く る

緑 陰 や 晴 明 今 も 冥 界 を 御 す

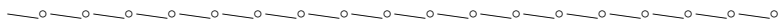
杉 落 葉 敷 き ゐ て 辻 の 猿 田 彦

山 寺 や 椎 落 葉 し て ひ る さ が り





山 祠 常 磐 木 落 葉 を 奥 へ 踏 む
若 葉 青 葉 プ ロ ム ナ ー ド は 水 に 沿 ふ
若 葉 青 葉 押 し ひ ら き ゐ る 水 族 館
青 葉 来 て 水 族 館 に 蛸 を ど ら す
新 緑 へ 水 族 館 の 海 豚 と ぶ
山 越 ゆ る 雲 へ ラ ム ネ 玉 鳴 ら し 飲 む
灯 を よ べ ど 薄 暑 の 道 の な ほ つ づ く
短 夜 も よ し と 湖 北 に 灯 を か か ぐ



—丸山佳子作品—

あらひ髪

丸山佳子

あらひ髪 浮世の風にすぐかわく
癒へし身はこゝろ花鳥に髪洗ふ
けふよりのいのち長かれ髪洗ふ
愛稱をもてりピカソの浴衣着て
かゞやきて夢の白蛇夫を追ふ



秀華採集

水面より雨の降り出し夕ざくら

片山 熙子

少し降り始めた雨に気づくのが遅れたのは「夕ざくら」のため。そして気づき方がたいへんよい。いずれにせよ「夕ざくら」の設定がすべてを決めている。

たんぼぼを翔たせふところ軽くなる

安田 優歌

極楽を素通りしたる朝寝かな

三宅 千鶴子

いつどこへ翔ぶのかたいへん気掛かりになっていたが「軽くなる」がいい表現となる。後句は、夜明けごろの深眠りをたのしく表現したのが手柄である。



—近詠—

鈴鹿
仁

跣足

風のみち極め山河の明易し
守宮落つうしみつ時の闇動く
守宮啼く知るよしもなき明日のこと
跣足の子おのが天下を取る如し
願かけの跣足参りは過去のこと



— 近 詠 —

和田 照海

花辛夷

嫁の荷に弓の袋や花辛夷
眠る山起こさぬやうに父逝けり
涅槃図にまだ十二支の揃はざる
海峡のおぼろへ船の灯を加へ
鞆幕府うたかたにして花の寺



花 筏 北村香朗
堀波にもて歩はされ花筏
花筏流れの果を言問はむ
散りてはや流れに組める花筏
ささ濁る流れの起伏花筏
江川せせらぎ縁の舗道丈高く

春惜しむ 藤岡紫水
天心に量大いなる春の月
耳に挿す鉛筆探す四月馬鹿
夢で聞く戦友の呼ぶ声亀鳴けり
水よりも空の冷たき花こぶし
春惜しむあるかなきかの雨を聴き

蟬しぐれ 竹貫示虹
大漁旗なびく舳先の日灼け顔
ひとかどのワルの気分やサンダラス
パリ祭の鬻體マークの男シヤツ
石橋の頂にて日傘傾ける
忠魂の森に人なし蟬しぐれ

松田都青
春の宵胸の泉に水を足し
大空にきつと穴あり揚雲雀
棺の窓ひらけよ外は花吹雪
花の昼俗な話の外に居る
暖かし老鶏卵を産み落とす

桜寒む 北川孝子
行く雲の影と歩みてさくら東風
まなざしを宙に集めて初さくら
聞き流す事のいくつか桜寒む
瞬月をけぶらせ桜の散る今宵
塗り椀にひとひら桜の浮き沈み

万緑 柴田朱美
万緑や水やはらかく流れけり
万緑にいのちのリズム弾みだす
万緑を来て大寺の深廂
万緑や体の重心浮いてくる
万緑の底で蹴爪を研いでみる



湖 北 丸 井 巴 水
丸窓に梅の影あり武家継がず
喋りたくなる逆光の猫柳
蒲公英やあした招きの蕾あり
柳絮に宛てあり運河越ゆるなり
鳥雲に湖北のほとけ半歩出で

リラ冷 塩 貝 朱 千
葉ざくちやキリンに会ひにエレベーター
垂直に象の放尿松の芯
はつなつの草原遠しフラミンゴ
出口より入りてぶつかるリラの冷
萎える月の玻璃戸いちまい若楓



夏季吟旅特別吟
豊田都峰
青の大地

新 緑 の 山 ま た 山 や 西 国 行
逝 く 春 を 高 く 奏 で て 岡 城 址
新 緑 の く じ ゆ う と 峙 せ る 高 石 垣
遠 霞 む 阿 蘇 は 祈 り に 天 降 り 臥 す
葉 医 用 構 へ し 屋 敷 の 樟 若 葉
竹 葉 散 る 洞 窟 に 弥 撒 洩 れ し 世 へ

くじゆうへとなりゆく新樹は新樹重ね
浴身をつつみて夜の新樹海
若葉青葉切り裂き天の橋ひとすぢ
溪に満つ滝天響のふたすぢに
阿蘇岳へもりあがりゆく青高原
絮たんぽぽ祈り姿の阿蘇へ発つ
青高原すべりて阿蘇に真向く風
鬼棲みし国東の代もみどりなる



京鹿子集

豊田都峰選

水面より雨の降り出し夕ざくら

フランスパンごしごし切つて仏生会

花は葉に素顔にもどる御所の鳩

両耳に余る囁り御所ぐもり

たんぽぽを翔たせふところ軽くなる

ふるさとは雲と蒲公英かぜに乗る

自画像の末端に足す貝母百合

落椿庭に師の光ゲ熾火なす

極楽を素通りしたる朝寝かな

ちらほらと涅槃の雪のあしたかな

京都 片山 熙子

高槻 安田 優歌

亀岡 三宅千鶴子

董買ふ今日の安らぎ持ち帰り

ものの芽を促す雨に目覚めけり

祖国より手にとるやうに花だより

花七分今日のメールを異国にて

咲く桜想ひ出一つ増やしつつ

来し方の出会ひと別れ花衣

四月馬鹿才ハイオ真白霽降り

外つ国も故郷めきて夜半の春

鳥雲に無言に行くや旅の果

入念に栗鼠の小さき手木の実植う

アリソナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子